

そのほか、この龍海寺に眠る人達をご紹介します。

⑧ 緒方郁蔵 墓 (龍海寺)

- ☞ 緒方郁蔵は本姓大戸、名を惟高。文化13年(1816)備中生まれ。江戸で坪井信道に学んだ時、緒方洪庵と出会ったことにより後に、適塾に入り洪庵を助け、義兄弟となり緒方姓を名乗るようになります。万延元年(1860)『独笑軒塾』を北久太郎町4丁目に興し、適塾を北塾、独笑軒塾を南塾といわれるようになりました。洪庵の死後、適塾一切を指図し 浪華仮病院(会報74号の蔵4回巻頭)にも力を貸しています。



⑨ 中 天游 墓 (龍海寺)

- ☞ 中 天游は緒方洪庵の恩師にあたります。天明2年(1782)生まれ。今の西区靱で蘭学塾『思々斎塾』を開き、後に京町堀に移りました。医業を妻さだに任せ、医学と蘭学の研究に打ち込みました。墓碑には「天游 中先生墓」と刻まれており、その文字がかろうじて読み取れます。



⑩ 大村益次郎 足塚 (龍海寺)

- ☞ 緒方洪庵の墓のすぐ隣に『大村兵部大輔埋腿骨之地』と書かれた碑が建っています。(昭和14年11月建立) 大村益次郎は、NHK大河ドラマ『花神』(原作:司馬遼太郎)の主人公としてとり上げられ一躍注目を浴びましたが、文政7年(1824)~明治2年(1869)に活躍した人です。周防の鑄銭司(せんじ)村で生まれました。弘化3年(1846)、23歳の時。父の医者継ぐことに決心し、大坂の適塾に入塾します。(その時の寓居跡の石碑が、西区土佐堀2丁目に建っています。)3年後には塾頭を務めますが、塾をやめ、郷里に帰り医者を開業します。



大村益次郎足塚の碑



西区土佐堀2丁目にある大村益次郎寓地址の碑

嘉永6年(1853)宇和島藩に招かれ兵書翻訳にあたりながら、蒸気船を造るという偉業を成し遂げます。その後今度は幕府から蕃書調所の教授にも招かれます。万延元年(1860)長州藩士となり、藩校教授、軍制・兵制の改革を命じられます。前回の会報で紹介しました「造幣局通り抜け」の発案者である第10代造幣局長だった遠藤謹助をはじめとし伊藤俊輔、井上聞多らをイギリスへ留学させることに成功します。第2次長州征伐の折は長州藩の参謀として高杉晋作同様幕府軍を蹴散らす大きな戦果をあげます。

明治維新後、新政府に出府し西郷隆盛の下で軍監兼参謀を務め、上野の山に籠った「彰義隊」を大村益次郎の作戦(アームストロング砲の使用)でいっぺんに片付けてしまいます。明治2年、大村は兵部大輔となり軍政改革を断行。廃刀令を強行、徴兵制度を布いて武士だけでなく広く農民や町民からも徴兵し、国民皆兵を行おうとしているところ、9月4日、京の三条木屋町定宿にて不平士族に襲われ、瀕死の重傷を負います。大坂病院に運ばれ洪庵の長子 緒方惟準や蘭医ボードウィンが治療にあたり、右大腿骨切断手術を受けましたが、甲斐なく手術の9日後、11月5日に亡くなります。切断した大腿骨は遺言により、ここ洪庵の墓の横に埋められました。

かすかさいよう
⑪ 春日載陽 墓 (龍海寺)

- ☞ 春日載陽は幕末期の医家。文化9年(1812)～ 明治19年(1886)。父の後を継ぎ、大坂の尼崎町に医業を営んでいました。大坂の開業医500ある中で、最も繁栄し、嘉永以来名医として評判が高かったようです。儒学は藤沢東暎から学びます。その後『医心庵』という塾を開き、医学と儒学を教えます。この塾に、坂本龍馬と共に活躍した海援隊士、長岡謙吉が嘉永元年(1848)15歳の時入門しています。その後、春日載陽は、文久元年(1861)備前岡山藩に招かれ在坂のまま藩医となります。

— 大阪城北詰駅周辺 —

- ☞ 今回最後の紹介は、場所を移動しまして、JR東西線「大阪城北詰駅」3番出口を地上に上がった辺り(大阪市都島区網島町)をご紹介します。私、個人的にもこの付近にある私学会館に、ある芸事を習うため、約4年間通った思い出深い場所です。

⑫ 石田三成邸跡 大阪市都島区網島町

- ☞ 昔、このあたりは中洲になっており備前島という地名でした。ここに豊臣政権の頃 石田三成、宇喜多秀家の邸がありました。豊臣秀吉の死後、徳川家康の勢力が増し、それを抑えようとする石田三成が対立し、三成憎しとする加藤清正、福島正則、細川忠興らが襲撃を企てていることを知った三成は、危機一髪で邸から逃げ、難を逃れます。その後、三成は本拠である近江佐和山城に蟄居を命じられます。それをいいことに家康は大坂に乗り込み、三成の邸跡に本拠をおきます。その後、大坂城西の丸にいた秀吉の正妻 北の政所(高台院)が京に移ったので、西の丸に再度本拠を移し居座ってしまいます。そして本丸の天守閣と同じぐらの天守閣を西の丸に築きます。

関ヶ原の合戦直前(一六〇〇年)の大坂城周辺の地図



生誕の地にある石田三成像
 (滋賀県長浜市石田町治部)



あじただんごぶろう
⑬ 藤田伝三郎邸跡

藤田伝三郎は天保12年(1841)5月15日長州の萩城下で酒造兼質屋の子として生まれました。幼少の頃より勉強家で尊王攘夷論がおこると志士と交際しました。その後、高杉晋作を師事し奇兵隊にはいります。蛤御門の変の際従軍しており、左腕に貫通銃創を受けるなど、身に数か所の傷を負います。明治になって、藩から不用になった兵器を買い求め大阪で売却し資産を作り、高麗橋で軍靴製造業を始め大当たりします。明治10年西南の役で巨富を得ますが、しだいに薩摩に憎まれてしまい、明治11年「ニセ札事件」で薩摩の謀略にあい逮捕されてしまいます。その後真犯人が見つかり釈放され、五代友厚の片腕として働きます。大阪商工会議所会頭を務めるまでに至りました。そして、この地に明治42年、近松門左衛門作の『心中天網島』の主人公 治兵衛と小春が心中したことで有名な「大長寺」跡地に邸を構えます。藤田伝三郎は趣味が多く、造園、茶湯、美術工芸等を財の続くかぎり買い集めました。昭和20年の大空襲で戦災に遭いますが、残った品を、日本で2番目の私立美術館として毎年春と秋のみ一般公開されています。



藤田伝三郎



大正期の藤田邸の写真



今も残る旧藤田邸の門

後記

イベントに参加くださった皆さん、本当にお疲れ様でした。龍馬に関する史跡が少ない大阪にも関わらず、たくさんご参加いただいたことに感謝いたします。イベントのメインにと考えておりました『泉布観』内の見学が、1時間の待ち時間の為断念せざるを得なくなり、楽しみにして頂いていた方には申し訳ございませんでした。毎年、3月20日前後の3日間、一般公開されるはずですから、是非機会があれば、来年以降ご見学ください。

さて、会報次号の「大坂の史跡を訪ねて」は、土佐堀通りなどにある各藩の蔵屋敷跡を中心にご紹介していきたいと思っておりますので、ご期待ください。